

異本病草紙の伝本に就いて

林 美 朗

日本医史学雑誌第四十七巻第四号 平成十三年一月十八日受付
平成十四年三月二十日発行 平成十三年六月三十日受理

〔要旨〕平安時代末期の十二世紀後半頃の成立とされる病草紙には、異本病草紙と称されるものが計十五本弱、写本で伝存している。しかしその書誌や成立、伝本の系統分類等の詳細に関しては、あまり研究がなされていない。本研究では、このような異本病草紙の成立と伝本の系統分類につき、考察した。その結果、それらは日本古代の「癡狂」の典型的症例を有する鎌倉時代以前成立の略本系統諸本と、江戸時代に至るまで増補・成立した尋常ではない、下賤な素材中心の広本系統諸本に二大別することができる。またその一部には、典拠となった症例も文献的に渉獵され得る。本研究は、このような異本病草紙の精神医学史資料としての意味にも言及し得るという点で、意味あるものと思われる。

キーワード——古代日本、異本病草紙、癡狂、写本系統分類

はじめに

およそ平安時代末期の十二世紀後半頃の成立とされる病草紙には、関戸家旧蔵・現京都国立博物館等蔵の国宝病草紙

や、神戸・香雪美術館蔵の異本断簡の他に、「異疾之図」とも称される異本病草紙があり、又それらとは全く別個に江戸時代末期の成立とされる、新撰病草紙と称されるものも伝存している。この中、関戸家旧蔵・現京都国立博物館等蔵の国宝病草紙は、鎌倉時代初期を下らない頃の成立とされるものであるが、それに対して「異疾之図」こと異本病草紙は、これまで紹介されているものや、管見に入ったものを合わせると、現在、計約十五本の写本の存在が確認されており、その図様の出入りや伝本の多様さと相俟って、これまで試みられてきた以上の詳細な文献学的考察が必要となってくるものと思われる。

本稿では、このような異本病草紙の伝本の系統分類等につき、考察を加えてみることにしたい。

一、異本病草紙の伝本と系統分類

まず、これら異本病草紙の伝本を比較対照したのが、諸本配列対照表である。すなわち異本病草紙の伝本はまず、十三図から十七図を有している杏雨書屋本と東京国立博物館乙本（A153^③、次の晴川本の識語の一部を欠くもの）、佐野みどりにより紹介された晴川本・東京芸術大学乙本・長井本・その他の略本系統と、大略三十五図前後を有している他の広本系統に二分類され得る。そして広本系統は更に、その図様の出入りや配列順序により、最大三十七図を有する京都国立博物館蔵の探幽縮図一本（第一類）と、新資料の早稲田大学図書館本・荻野篤彦らにより紹介された錦小路家本、それに諸家により紹介されている松井本・東京芸術大学甲本・為恭本・柏木本・その他の第二類、それと識語を持たない新資料の国立国会図書館本と佐野により紹介された大島本・東京国立博物館甲本の三本（第三類）の計三群に下位分類され得る。表中の各番号は、佐野により付された探幽縮図の各図様を示しているものであり、又対照表にも見られる如く、各系統・各群内では小異はありながらも相互に類似、共通した各図様の出入りや配列順序が指摘され得る。又柏木本・その他も佐野によれば、内実は不詳ながらも起始段と終焉段からすれば、広本系統第二類に属するものようである。

ところで広本系統の国立国会図書館本をはじめとする三本(第三類)は、比較的新しい、江戸時代末期から明治期の模写になるものであるが、第一類の探幽縮図は寛文年間頃の写、又第二類の為恭本と早稲田大学図書館本も寛文九年(一六六九)の識語が最初に付されているものである(但し、為恭本は弘化三年(一八四六)の転模写本の由、又早稲田大学図書館本は、その更に嘉永元年(一八四八)の淵潭齋守純による転模写本である)。又錦小路家本も安永四年本の天保六年(一八三三)の転模写本である。しかしこれらの中で最古の写本となると、およそ南北朝期頃の書写とされている略本系統の杏雨書屋本がそれに当たり、その享和四年(一八〇四)という識語は後に付されたものであつて(東京国立博物館乙本・晴川本は更に文政四年(一八二二)の、又長井本は天保十三年(一八四二)の転模写本の由が見えるとされる)、その他のものとはその意味では一線を画すると言ふべきものであるように思われる。又この杏雨書屋本には「異疾之図一七枚」という記載も存しており(晴川本・長井本等も同じ。東京国立博物館乙本では脱落)、略本系統でもその他のものは、この原本とも言うべき杏雨書屋本が後にその図様の配列等が変更、乃至は脱落したのではなかったかと思われる。又この杏雨書屋本が南北朝期頃の写本であるという意味では、少なくとも略本系統の諸本に見られる大略十五図前後の図様のみは、鎌倉期頃までに既に成立していたと言へるもののように思われ、その他の広本系統の三群は、その上に更に後代に至つてから増補されたものと考えられるのである。

ここで、杏雨書屋本に見られる十七図とは、1 屍体を食う狂女、3 婦人病の女、4 卵巣囊腫の女、6 眼疾の男と治療する老女、9 陰囊を指さす男、13 肥満の女、14 背中に膿瘍がある女、15 顔面に瘤のある女、20 幼児の鍼治療、22 狂人と屍体、24 甕の男、25 女の胸に呪いを書く僧侶、26 象皮病の女、27 口の無い男、30 背中に瘤のある女、33 鼻に腫瘍のある女、34 腸瘻の男の各図様である。この中、9 と、25、27 の三図は東京国立博物館乙本と晴川本にはなく、東京芸術大学乙本にはあるものの、該本には反対に13 と15、22、24、33 の五図が欠脱している。この中13 は、他の略本系統でも広本系統第一・三類に見られるものの右半分のみであり、広本系統第二類では、その左右半分ずつが別々の配列順序の中に

対照表

松井本	芸大甲本 (柏木本 他)	錦小路家本	早稲田本 為恭本	国会本	大鳥本	東博甲本
35図	35図	36図	35図	34図	34図	33図
1	1	1	1	23	23	23
21	21	21	21	17	17	17
29	29	29	29	30	30	21
22(屍体あり)	22(屍体あり)	22(屍体あり)	22(屍体あり)	20	20	16
28	28	28	28	16	16	25
13(左半分)	13(左半分)	13(左半分)	13(左半分)	6	6	31
<u>35(一部)</u>	<u>35(一部)</u>	<u>35(一部)</u>	4	25	25	11
4	4	4	3	31	31	5
3	3	3	6	5	5	12
16	37	37	37	21	21	13
23	7	7	7	12	12	14
17	6	6	15	13	13	4
5	15	15	24	14	14	6
13(右半分)	24	24	18	4	4	27
12	18	18	25	3	3	15
11	25	25	2	27	27	7
30	2	2	16	37	37	37
31	16	16	23	7	7	22(屍体なし)
20	23	23	17	15	15	28
14	17	17	5	22(屍体なし)	22(屍体なし)	30
34	13(右半分)	5	13(右半分)	28	28	20
27	12	13(右半分)	12	2	2	29
26	11	12	11	29	29	3
33	30	11	30	24	24	24
19	31	30	31	10	10	34
9	20	31	20	9	9	18
8	14	20	14	18	18	32
10	34	14	34	32	32	1
24	27	34	27	8	8	2
18	26	27	26	1	11	26
2	33	26	33	11	1	33
37	19	33	19	34	34	10
7	9	19	9	33	33	8
6	8	9	8	26	26	
15	10	8	10			
		10				
25	5					9
32	32	32	32	19	19	19
			35	35	35	35
36	36	36	36	36	36	36
異疾之図 17 枚 伝光長筆 安永 9 年				江戸末期	1927 年	明治期?
	安永 4 年	伝光長筆 安永 4 年 天保 6 年	伝光長筆 寛文 9.嘉永元 寛文 9.弘化 3			

表 1 諸本配列

杏雨書屋本	東博乙本	晴川本	芸大乙本	長井本 他	京博本
17図	14図	14図	13図	17図	37図
14	14	30	27	18	1
9(膝を指す)			4		2
30	30	14	20		3
20	20	20	30		4
3	3	3	26		5
25			6		6
13(右半分)	13(右半分)	13(右半分)	9(膝)		7
24	24	24	34		8
22(屍体あり)	22(屍体あり)	22(屍体あり)	14		9
15	15	15	1		10
33	33	33	13(右半分)		11
1	1	26	25		12
6	6	6	3		13
4	4	4			14
34	34	34			15
27					16
26	26	1		1	17
					18
					19
					20
					21
					22(屍体あり)
					23
					24
					25
					26
					27
					28
					29
					30
					31
					32
					33
					34
					35
					36
					37
					(欠脱図)
					→→
異疾之図 17 枚 伝光長筆 享和 4 年 (南北朝頃写)	() 伝光長筆 享和 4.文政 4	異疾之図 17 枚 伝光長筆 享和 4.文政 4		異疾之図 17 枚 伝光長筆 享和 4.天保 13	寛文年間頃



図 1

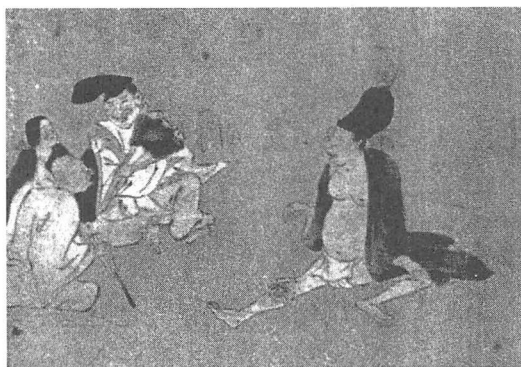


図 2

位置している。これは、元来は大きな一図の古い療養所風景であったものかと思われ(図1)⁽⁸⁾、略本系統諸本成立の当初にも、その左半分は或いは既に伝存していたのであるのかもしれない。それを全く欠いている東京芸術大学乙本は、そのような成立事情とも関係しているものかと思われるが、15と33はともに顔面にできた腫れ物という点で重複しているところから、この東京芸術大学乙本で欠脱しているということも考えられ得る。このことは、9の「陰囊を指さす男」が杏雨書屋本と同様(図2)、東京

芸術大学乙本では膝頭にできた人面痘を指さす男の図となっており、佐野によれば「本来のモチーフ」は「白描本で図様の崩れが少ない善本である」芸大乙本にあるごとく膝頭にできた人面痘を指さす男であつて、「人面痘という症例があまり奇抜であるため、転写を重ねるうちに陰囊に病をもつ男の図様に変わってしまった」のではないかとされているところとも関係するかと思われるものである。

なお22と24の東京芸術大学乙本の欠

脱は、単なる誤脱によると思われるものである。又略本系統で唯一、18の「下痢の女」の図を有する長井本・その他の一本は、佐野によれば起始段と終焉段、並びに識語等の他は内容の不詳なものであるが、次に、これら異本病草紙の略本・広本系統諸本の成立と、その典拠となったところのものにつき、見てみることにしたいと思う。

三、異本病草紙の成立と典拠

異本病草紙の中でいわゆる「癪狂」の症例として佐野は、2踊る僧侶、8ペニス切断の僧侶、16炉に倒れる僧侶、21喧嘩する狂人の僧侶、22狂人と屍体、36露出狂の女を挙げている。それに対し、1の「屍体を食う狂女」や19の「色情狂の女」、37の「行水する女達」などは「老」の主題に属するものであるとされているが、略本系統の諸本にも共通して伝存する1の「屍体を食う狂女」の図は、『日本紀略』の天徳二年(九五八)閏七月九日の条に見られる「有一狂女。於待賢門前取死人頭食之」とあるところと強固に合致しているものである。これは、22の「狂人と屍体」の図と同様、岡田靖雄も指摘される如くに天徳二年当時の飢饉と流行病により「死と死体とはまさに身ぢかにころがっていた」時期の様子が活写されたと言っても過言ではないもののように思われるが、荻野らは鴨長明の『方丈記』に見られる平安時代末期の養和飢饉の頃のことと活写されたものと想定している。いずれにしろ、それらは略本系統の諸本に見られる図様の典拠・素材となつたところのものが、かなり古い、平安時代にまで遡り得るものであることを示唆することであるように思われる。これは、6の「眼疾の男」のモチーフが平安時代末期成立の国宝病草紙にも見られるものであることからも言えることでもある。しかるにこれが広本系統の諸本になると、更に多彩な図様や症例が見られるようになってくる。その中、16の「炉に倒れる僧侶」の図は、鎌倉時代末期の説話集『沙石集』の中の「癪狂の病有る男」の話に典拠が求められるように思われるものであり、そのことを考えるならば、これら広本系統の諸本の増補・成立もその頃に既に行われ始めていたものであつて、略本系統諸本の成立は、或いはそれより以前にまで遡り得るものであるのかもしれない。



図 3

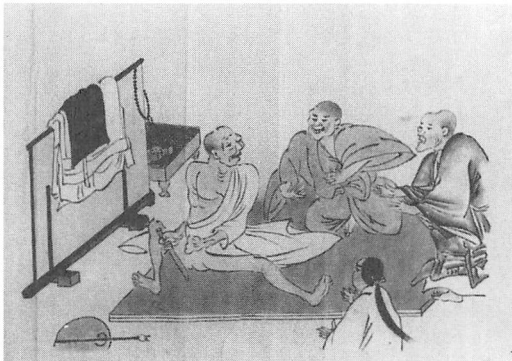


図 4

い。その他、広本系統諸本には21の「喧嘩する狂人の僧侶」や37の「行水する女達」(のぞき)、又一部の写本にしか伝存しない35の「乞食の男」など、必ずしも病氣とは言えない、佐野の言う「尋常ではない、下賤な素材」中心の風俗画が見られることも特筆されるところである。が、ここでそれ以上に注目されることは、佐野も指摘する「必要以上に性的な興味が強調され絵画化され」た、「猟奇的な図様」がこの広本系統諸本には数多く見られるということである。

すなわち図3は「踊る僧侶」と題された、男性器を露出させて急に踊り出した露出狂の僧侶の図と思しきものである。この広本系統諸本においては、このような露出狂の症例が多いこともその大きな特徴の一つであり、これも古典における露出狂の症例として極めて珍しく、又興味深いものであると言えるように思われる。また図4もやはり、男性器を包丁で切断しようとしている「ペニス切断の僧侶」の図であるが、更に京都国立博物館蔵の探幽縮図には、該本のみしか伝存しない「露出狂の女」の図も見られ

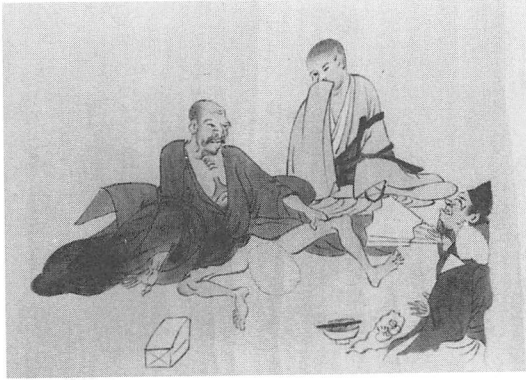


図 5



図 6

ている。もっともそこでは女の露出狂の他に、貧困や乞食等もその主題となっているように見受けられる。

なお、ここで第二類本では32の「布を裂く女」の図、また第三類本では19の「色情狂の女」の図をそれぞれ欠いているが、これは、探幽縮図ではそれらが33の「鼻に腫瘍のある女」や18の「下痢の女」の図と連接して付随的な形で見られていることから、その一部をそれらの諸本が模写し落としたか、省略したことによる異同であるものと思われる。又これらの広本系統諸本の三群の中、いずれが古い形であるかを考量するに、22で狂人の傍らの屍体を略本系統と同様に有し、元来、大きな一図の13（前掲図1）の左右半分ずつを別々の配列順序の中に位置させている第二類本が早い形であり、そこから13が一図となつて36の「露出狂の女」の図が増

補されながらも、22は略本系統と同様に有している第一類本と、36は欠くものの13がやはり大きな一図であつて、22はその屍体を欠いている第三類本とに分れ出たのではなかったかと考えられる。

ところで、これらの広本系統諸本の図様・症例がいかなる典拠に基づいているものであるかに関しては、残念ながら未だ詳



図 7



図 8

とから考えるならば、それらは新撰病草紙の成立年代とされる嘉永三年（二八五〇）前後の江戸時代後期の症例・エピソードである可能性もあるように思われる。

いずれにしても広本系統諸本の成立は、このように江戸時代にまで下ることが考えられるものであり、その各症例も

しくは判明していない。この中、「必要以上に性的な興味が強調され絵画化された」、「猟奇的な図様」である露出狂に関しては、平賀源内こと『風来山人集』の中に、男性器の下ネタばかりを集めた「瘞陰隠逸伝」という珍奇な一書があり、或いはその辺りの当時のゴシップ等が下敷きとされているのかもしれない。又10の「陰囊の大きな僧侶」（図5）、3の「婦人病の女」（図6）、18の「下痢の女」の図はそれぞれ新撰病草紙の中の「陰囊腫瘤」（図7）、「子宮脱」（図8）、「老人性失禁症」（図9）等と同様の図様・主題であり、そのこ



図 9

単なる転載であって、必ずしも佐野の言うような江戸時代中後期の時点での枚数の違いや、残余という点で帳尻を合わせて考える必要はないのではないかと思われるのである。それよりも、ここで考察してきた日本古代の「癪狂」の典型的症例を有する鎌倉期頃成立の略本系統と、江戸時代に至るまで増補・成立した「尋常ではない、下賤な素材」中心の

厳密な「癪狂」の症例と言うよりむしろ、佐野の言う「猟奇的な図様」や、「必要以上に性的な興味が強調され絵画化され」た「尋常ではない、下賤な素材」中心の、「多様な人間の実相が織りださ」れんことに焦点が当てられていたものではなかったかと思われる。又その意味ではこの異本病草紙の諸本は、佐野の言う「病の多様性に対する興味」を主体としつつも日本古代の「癪狂」の典型的症例も有する、杏雨書屋本を原本とする鎌倉期頃成立の略本系統と、江戸時代に至るまで増補され、成立した「尋常ではない、下賤な素材」中心の広本系統諸本という、いわば成立・構成論と連繫した系統分類論が可能であるように思われるが、同じく佐野が広本系統第二類の早稲田大学図書館本や為恭本識語に見られる寛文九年時に「模写の際、三十数図であった異本病草紙は」、松井本に見られる「安永九年に光貞が極書を記した時には十七図になっていた」（松井本には安永九年（一七八〇）の識語と「異疾之図十七枚」の記載がある）、又略本系統の諸本に見られる「享和四年に光貞が目にした「異疾之図十七枚」は残りの図様ではなかっただろうか」と言われている点については、なお一考を要するように思われる。すなわち松井本の「異疾之図十七枚」なる記載は多分、鎌倉期頃成立の略本系統の諸本に多く見られるもの

広本系統諸本という、成立系統論的差異や、その典拠となった症例の断層を見る方が、精神医学史資料としての異本病草紙を考える上にはより意義があるように思われるのである。

四、おわりに

以上、本稿では異本病草紙の伝本につき、その文献学的な考察と系統分類論を試みてきた。本研究が異本病草紙の精神医学史の意味を更に考究するよすがとなることを期待しつつ、以上で筆を擱くことにしたい。

参考文献・注

- (1) 岡田靖雄「日本の精神科医療史ノート(2)」『最新精神医学』四巻二号、一九五〇頁、一九九七
- (2) 岡田靖雄「日本の精神科医療史ノート(3)」『最新精神医学』四巻三号、三〇七〜三一二頁、一九九七
- (3) 宗田一「『異本病草紙』の古模本」第一八回杏雨書屋特別展示会パンフレット、一九八六
- (4) 佐野みどり『風流造形物語 日本美術の構造と様態』、五一九〜六〇二頁、スカイドア、東京、一九九七
- (5) 荻野篤彦、服部瑛「『異本病草紙』について」『皮膚病診療』二一卷八号、七五一〜七五九頁、一九九七
- (6) 唐澤至朗、服部瑛「錦小路家本『異本病草紙』の制作、流布の史的背景」『群馬県立歴史博物館紀要』二〇巻一号、一〇七〜一二六頁、一九九七
- (7) 宗田一は「江戸期以前に遡る古模本」としか述べていないが、京都の某鑑定家によれば、そのように鑑定されているという。
- (8) 以下、図2を除く図6までは、国立国会図書館本によるものである。
- (9) 『日本紀略』新訂増補国史大系第十一巻、七三頁、国史大系刊行会、東京、一九六五
- (10) 『沙石集』上巻、岩波文庫、一〇八頁、岩波書店、東京、一九九七。なお「この病は、火の辺、水の辺、人の多かる中にし
て発る心うき病なり」とある。
- (11) 以下、図9までは日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成』第一巻、一七七〜一九三頁(三一書房、東京、一九七八)
所収の図版による。(岐阜大学医学部)

On the Text of *Ihon Yamai-no-Soshi*

Yoshiro HAYASHI

There are about fifteen variant texts of *Yamai-no-Soshi* (*Ihon Yamai-no-Soshi*), which is considered to have been originally compiled in the late Heian period (latter half of the twelfth century). However, few discussions have ever addressed the work's bibliography, formation or text in detail.

In this study, the formation and text critique of *Ihon Yamai-no-Soshi* are considered. It is found that the variant texts can be divided into two categories, short and long, the former describing mainly the *ten-kyo* cases typical of ancient Japan before the Kamakura period, and the latter including the atypical and vulgar cases of the Edo period which were added later. For part of the texts, the corresponding source texts were found through the bibliographic research.

This study highlights the value of *Ihon Yamai-no-Soshi* as a reference text for the historical study of psychiatry.